

吉田研作先生講演会報告

2016年10月16日(日)、J PREP 齊藤塾渋谷校にて、J PREP 生徒・保護者を対象に、吉田研作先生をお迎えして講演会を開催致しました。

吉田研作先生は英語教育、バイリンガリズム、異文化間コミュニケーション教育の第一人者であり、文部科学省の「英語教育のあり方に関する有識者会議座長」を務めるなど、英語が使える日本人の育成に関する研究、活動を行っておられます。

講演会では、「話す」「書く」「読む」「聴く」4技能を万遍なく重視する英語教育と大学入試英語改革等について熱く語っていただきました。英語教育研究と政策の第一線でご活躍の吉田先生から直接お話をうかがうことができる貴重な講演会となりました。

以下、講演の要旨をご紹介します。



吉田研作先生 上智大学 言語教育研究センター特別招聘教授、言語教育研究センター長。1948年京都生まれ。上智大学外国語学部英語学科卒業。同大学大学院言語学専攻修士課程修了。ミシガン大学大学院博士課程修了。

国際共通語としての英語力の育成 大学入試英語は4技能試験に変わる

【日本人の英語力の現状】

今の日本人の英語力は、アジアの中で下位にあり、特に発信力の低さに問題があります。

TOEFL iBTを見ると、日本はスピーキングとライティングのスコアがアジアの中でほぼ最下位です。これは、学校の授業が受け身中心であり、自ら発信して自らの考え方を述べていくというような、能動的学習を促す教え方がなされておらず、自分から自分の意見を言っていくことに多くの日本人英語学習者が慣れていないことが要因となっています。そしてそのような語学力に対する自信のなさ、「内向きの日本人」といわれるように、英語に対する積極性の無さにつながっています。

この状況をどのように払拭するか、ということで、4技能テストの導入が進められています。なぜなら、どんなに英語教育のあり方を変えていっても、出口である大学入試を変えないと日本人の英語力は変わらないからです。そういうことで、現在、大学入試英語改革が行われています。

【今までの英語教育の問題】

今までの英語教育で問題なのは、「間違えてはいけない」という思い込みがあることです。学習指導要領には「標準的な英語を教えましょう」とあります。ここでいう

「標準的な英語」とは、ネイティブスピーカーの話す英語のことです。ネイティブのように英語を話さなければならないとすると、「間違えられない」「うまく英語が使えなかったら恥ずかしい」ということとなります。そのため、これまでの英語教育では劣等感を助長するような内容になっていました。

また、学校の英語授業は文法を機械的に学び、「読む」ことだけに重点が置かれすぎていました。積極的に英語を使って議論をしたり、自分の考えを書いたりといった能動的な技能は軽視されてきました。一つの要因としては、生徒の手本たるべき英語の先生方が「間違えることを過度に恐れて」、文法ドリルを解いたり、文法解説を聞いたりといった受動的な態度しか生徒に植え付けてこなかったという要因が挙げられます。

【国際共通語としての英語】

では、どのような英語を教えればよいのでしょうか。

学習指導要領の解説書にある国際共通語としての英語とは、「誰かと一緒に共有している」英語のことです。これは客観的な文法や発音体系があるわけではないのです。なぜかという、私と外国の方が話し

ているときに、お互いの意図が二人の間で共通して理解し合えるための共通語を創り出すからです。これは一回ごとに変わります。お互いに相手が言っていることの意味を探りながら、相手が分かるように話したときにはじめて、「国際共通語としての英語」となるのです。

そのような英語を身につけるためには、コミュニケーション中心の授業が必要になります。コミュニケーションにおいては、相手がいいて、相手に合わせて話します。相手の言っている内容やレベルを意識しながら



ら、お互いが理解できるように言葉の調整をした英語が国際共通語としての英語であり、これからの日本の英語教育が目指していくべき英語なのではないでしょうか。

必要なのは「国際共通語としての英語」であって、ネイティブスピーカー同士だけで話す英語ではありません。アメリカ人の英語、イギリス人の英語がネイティブの英語としてあるのと同様に、インド人の英語、シンガポール人の英語の多くもネイティブの英語です。私たちが話す日本語がひとりひとり違うように、英語もひとりひ



English を使って相手とコミュニケーションをとることによって、our English を創りあげていくのです。大切なのは、相手とコミュニケーションがとれるかどうかです。

【Can-Do リストへの期待】

このような英語教育を実現するためにも、今度の学習指導要領の中には Can-Do リストを到達目標として取り入れていく予定です。この Can-Do リストとは、文法や具体的な形よりも、「英語で何ができるか」といった到達目標を重視したものです。たとえば発音がきれいかどうかといったことよりも、「英語を使って自分の意見を人にはっきり言えるか」「人が言ったことに反論できるか」といった言語の機能面を重視したものです。

具体的には、まず国が作った Can-Do リストを、学習指導要領に載せます。それを今度は各学校がそれぞれの生徒に合うものに変えていきます。それらを絶えず検証しながら、授業づくりにつなげていかなければなりません。

また、生徒たちにも Can-Do リストを渡します。「この授業ではこういうことができるようになります。」ということを示します。授業の終わりに、その目標が達成できた生徒が感じることができたら、その授業は成功したことになります。

では、このような英語教育の最終目標は何でしょう。「相手の意見を的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり、相手を説得したりすることです。」そしてこの目標に対して「あなたはできますか?」と問いかけ、「Yes, I can.」と答えられる日本人を何人育成できるか。これがこれからの日本の英語教育の目標です。

【現在の大学入試の問題点】

では、そのような英語力を育成するための大学入試についてお話しします。

現在の大学入試の問題点は、「読む」と「聴く」の2技能しか測れないことです。センター試験はリーディングとリスニングだけ、各大学の個別入試はリーディングしかないところがまだ多いのです。こういう入試状況では、小学校、中学校、高校の英語教育でどんなに改革をしていったとしても、自らの意見をしっかり述べられる国際的に英語を使える日本人は育成できません。

【今後の大学入試英語】

文科省は今後の大学入試では、4技能を総合的に育成・評価することを重視します。4技能を総合的に評価できる問題の出題、たとえば、記述問題・面接試験などを、民間の英語試験（TEAP など）を活用することによって実施しようと考えています。

民間試験の活用について、4技能を測定する試験のうち、CEFR との関連を考慮することになっています。CEFR とは、「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠」というもので、評価基準として一番客観的で世界で最も受け入れられているものです。これから使われるテストも、国際的に認められているような基準に沿って作られたテストであり、かつ客観的であるという証拠が必要になります。

【大学入試が変わる】

2020 年から大学入試は変わります。具体的なテストとしては、高等学校基礎学力テストと大学入学希望者学力評価テストの2つが考えられています。

高等学校基礎学力テストでは、高等学校でやるべきことがちゃんとされているかを測定するテストです。これは、結果を入試に役立てるものではなく、授業を改善するためのテストです。英語に関して言えば、スピーキングを含む4技能テストです。高校の先生たちにスピーキングやライティングに携わってもらう、そういう教員訓練も含めた考え方です。

もうひとつは、今のセンター試験に代わ

る、大学入学希望者学力評価テストです。ここでは、知識技能と、思考力・表現力・判断力が測定される必要があります。この思考力・表現力・判断力は、英語では、スピーキング・ライティングをさせることにより試そうとしています。

最後に、これまで上智大学と英検で共同開発を進めてきた TEAP についてです。TEAP は4技能（読む、聴く、話す、書く）の各技能がそれぞれ100点満点で評価され、合計400点で計算されます。TEAP では、思考力・判断力が試されます。難しいですが、非常に面白い問題になっています。TEAP はセンター試験より難しいですが、TOEFL iBT と比べると難しくなく、ただ、どちらもアカデミックな英語力を測っているため、TOEFL iBT との相関は高く、測定している英語の能力はどちらも同じであるといえます。

大学入試が変わる。これからの大学入試英語で、能動的な技能である「話す」「書く」が試されるようになります。今までの「読む」「聴く」と合わせて4技能が万遍なく問われます。そうすることで、高校入試も影響を受けますし、中学校の英語の授業も学習指導要領に沿った4技能重視の授業が行われます。受験期に実用的な英語学習をやめ、ひたすら過去問対策をやるといった必要がなくなります。つまり、小学校から大学まで一貫性のある英語教育が行われ、普段の授業で身につける英語4技能がそのまま入試で問われる時代へと変わっていくでしょう。これからの大学入試はスピーキング試験を含めた4技能統合型で実施され、大学入学試験による波及効果もたらす本物の英語教育・英語学習が期待されています。

